

美大生がまちおこしを提案！

5月8日（金曜日）、女子美術大学杉並キャンパス（和田1-49-8）で、学生たちが考える杉並のまちおこしの提案が行われました。この催しは、同大アート・デザイン表現学科の授業の一環として行われたもので、杉並区の課題や特性を洗い出し、美大生の感覚で解決方法を見出し、それらをまちおこしにつなげていこうとするもので、区企画や交流の担当者も見守る9つのグループが発表を行いました。

女子美術大学は、1900年（明治33年）に、女性の地位向上を目指し開設されました。「女子美」の名で知られています。その女子美には、様々なコースがありますが、アート・デザイン表現学科に籍を置く180名が、この4月から取り組んできたのが、学校のある杉並区をテーマに、地域独自の課題を探りだし、アートデザインによって、問題解決のための提案を行うことです。180名の学生が7～8名のグループに分かれ、杉並区から提供された人口や産業などのデータを精査したり、まちに出て地域の声を集めるなど様々な課題を探りだしてきました。その課題を美大生・女性・若者の感覚で解決法を見出し、ビジュアル的に判りやすく表現しました。



提案の一つは、「ナミナミ食堂」と名付けられました。それは、JR阿佐ヶ谷駅から徒歩2分の阿佐谷地域区民センターの利用者が少ないことを課題にしています。メンバーは、現地を調査

すると恵まれた立地条件で建物の広さも十分にあるのに、利用しているのは高齢者が大半。立派な設備のある調理室は、ほとんどが利用されていません。その理由は、調理室を利用するときに履き替えなければいけないスリッパが可愛くないことに着目。まずはスリッパやエプロンを刷新し、若者が喜ぶものにすべきと提案。そして、地域のレストランや料理上手な主婦を講師に、料理教室を定期的に開催し、参加者が一緒に調理を行います。また、調理したものは、地域の独り暮らしの高齢者などと一緒に食卓を囲むことで、商店会と住民、施設の有効活用で地域のつながりを深めることができると提案しました。

また、別のグループは、杉並区に住む外国人に注目。中でも、中国、韓国・朝鮮に次ぎ3番目に多いネパール人との交流ができないかと考えました。杉並区には、国外唯一のネパール人学校があることから、近年増加傾向にあります。そのネパールは、調べていくと、多言語国家で言葉を使った交流が難しいことがわかりました。それならば、万国共通のダンスでのコミュニケーションをと考えました。杉並の高円寺には、東京の夏の風物詩となった阿波おどりがあります。ネパールの「ネ」と阿波おどりの「波」を組み合わせた「ネ波（ネパ）」は、ネパール人と日本人でつくる連です。こんなアイデアを考えている最中に、ネパールで大地震が発生。メンバーは、「ネ波」のうちわや缶バッジを作成して、売り上げを現地届けたいと話していました。